

特別支援教育実践マニュアル

< No.1 >

「学校教育法の一部を改正する法律」が公布され、平成19年4月1日から施行されることになりました。

これまでの特殊教育の対象に加え、通常の学級に在籍するLD・ADHD・高機能自閉症等を含めた発達障がいのある児童生徒も特別支援教育の対象になります。

そこで、特別支援教育の実践にあたり、学校生活の様々な場面で見られる「気がかりな行動（子どもにとっての困り感）」に焦点をあて、その行動の背景の理解に基づくサポートの方法をマニュアルとして作成しました。

「困り感」へのサポート

事例1. 全校集会になると奇妙な行動をはじめ

事例2. 必要な持ち物が見つからず授業の流れから遅れてしまう

事例3. 毎朝、決まった行動をしないとパニックを起こしてしまう

「困り感」からの児童生徒理解

これまで児童生徒の示す「気がかりな行動」を「困った行動」、いわゆる「問題行動」として捉える傾向はなかったでしょうか。

特別支援教育においては、困っているのは本人自身であるという観点から、その子が抱く「困り感」をしっかり受け止め、その理解に基づいたサポートの方法を提案します。

浦安市教育委員会
教育研究センター

困っているのは誰？

支援を必要としているのは子ども自身です。



先生・親が困っているかどうかではありません。

特別支援教育は一人ひとりの教育的ニーズに応えます。

「困り感」へのサポートの実際

事例1. 全校集会になると奇妙な行動をはじめ

Aさんは、勉強はよくできるほうですが、時々奇妙な行動をとることがあります。

朝の健康観察では、自分の順番になると「フビベベブー」と意味の分からないことを言ったり、クラス皆で行動するときになると落ち着かなくなり、一人寝転んでしまったり奇妙な行動をおこしたりしてしまいます。

集団が大きくなるとその傾向が強まり、体育館で行われる全校集会の折には、ぴよんぴよん飛び跳ねたり、校長先生のお話の最中に、いきなり「校長先生125キロ！」と、大きな声で繰り返し言ったりします。

Aさんの困り感とは？



Aさんは集団の中に居ることがとってもストレスなのです。先生と一対一なら大丈夫なのですが、クラス皆でやることだけでも苦痛なのです。まして体育館での全校の集会となると我慢も限界だったのです。

クラスの友だちは当然のように一斉行動をとれるのに、Aさんには集団の中でどう動いてよいかわからず困っていたのです。

集会の意味もよくわからず、大勢の人の中でいつまで続くのかもわからず、不安でいてもたってもいられず、思わず声が出てしまうほどだったのです。

サポートの方法

- ・ **見通しを持たせる**・・・これから起こること、次にすることの見通しを持てるように前もって教えておきましょう。予定を知らせておくようにします。何時には終わるか言っておくのもよいでしょう。
- ・ **具体的に教える**・・・集団行動や集会の内容を前もって教えておきます。できるだけ具体的に説明しましょう。例えば「集会では」、誰がどんなことを、どういう順番で行うのか、自分は体育館のどこで何をしたらよいのか具体的に教えます。
- ・ **逃げ場も用意しておく**・・・あまりに混乱がひどい時には、その場から離れてすごせる場所を用意しておきます。

事例2. 必要な持ち物が見つからず授業の流れから遅れてしまう

B君は、持ち物の整理整頓ができません。

算数の時間、先生から分度器を出すように言われても、ぐちゃぐちゃの机の中から見つけれず、一人授業の流れから遅れてしまいます。

机の上もいろいろなものが山積み状態、机の周囲にはいつも何か持ち物が落ちています。先生からは片づけるようにいつも言われるのですが、身につかないのです。また、忘れ物も多く授業に必要なものが足りないこともしばしばです。

B君の困り感は？



B君は一つのものを見続けることが苦手なので、目に入ったものが次々と気になり、他のことを始めてしまうのです。

片づけの手順を考え、段取りを描くことができずに困っていたのです。

また耳から入った情報を記憶にとどめておくことが苦手なので、言葉だけの指示では覚えていられず忘れ物も多くなってしまうのです。

サポートの方法

- ・ **手順を具体的に視覚化する**・・・片づける場所や片づけ方を絵で示し一目でわかるようにしましょう。持ち物カード、チェックリストを使うのもよいでしょう。
- ・ **集中できるように声かけする**・・・個別に声かけをして注意を喚起します。できそうなものに絞って「～の片づけが終わってから遊ぶ」と目当てを確認します。覚えられるように粘り強く繰り返しましょう。
- ・ **しっかりほめる**・・・できないことを指摘するよりも、少しでもできたり取り組む姿勢が見えたりしたらしっかりほめましょう。「できる」ことに気づき自信が持てるようにしましょう。

事例3. 毎朝、決まった行動をしないとパニックを起こしてしまう

C君は、毎朝登校すると玄関で飼っている熱帯魚の水槽に顔を近づけてジーンと見つめるのが習慣になっています。

次に給食室をのぞき、最後は図書室の図書カードを確認しに行きます。それを繰り返すので、教室にたどり着くのに20~30分、長い時は1時間もかかってしまいます。先生が無理やり教室へ行かせようとする、ひっくり返って泣きわめき暴れます。教室の中でも普段の日課の変更があったり、順番が違ったりするとパニックを起こしてしまいます。

C君の困り感は？

C君は、新しいこと、初めてのこと、変化することがとっても苦手です。

入学して初めて体験することは怖くて、不安で仕方なかったのです。C君にとっては、学校の生活は予測のつかない変化の連続です。また、音や臭いに過敏なC君には、毎日が騒音と異臭で我慢できないくらい困っていたのです。登校時の同じものを見たり臭いをかぐパターン化した行動は、不安な気持ちを安定させるものだったのです。



サポートの方法

- ・ **予測できるように見通しを**・・・こだわりの背景にある不安に対して、変化への見通しを与えます。黒板に予定を順番に示したり、カードや写真を使って具体的に視覚に訴えたりすることも効果的です。変更がある時には前もって伝えておきましょう。
- ・ **こだわりを許容する**・・・いきなりパターン行動をやめさせようとする、さらにこだわりが強くなることもあります。周囲に支障のない限り生活に見通しがつき安心感が育つまで、ある程度こだわりを許容することも必要です。
- ・ **感覚刺激への対処**・・・感覚刺激への過敏さからくるつらさへの対処が必要です。刺激から遠ざける。それが難しいときは音に対しては耳栓・イヤホンをつける、臭いにはマスク・ハンカチを当てたり窓を開けたりして換気をしましょう。味覚や触覚の過敏から偏食や感触からくる着る物（衣類）へのこだわり行動もしばしば見られますので、そのつらさを受け止めながら克服の工夫をしましょう。

まなびサポート事業

特別な教育的支援を必要とする子どもの学習環境を整え、より豊かな学校生活を実現できるよう支援していきます。

教育研究センター 381-7960・7961

まなびサポート相談室〈見明川中学校内〉390-5204

